

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

箸を思う

(本稿での特別な問題意識は割箸)

箸は日本人などにとって伝統的で身近な道具で、たわいない題材だが、色々な視点があり、感じるところもある。2本の同じ棒からなり、物を掴まんだりするのに手の代わりをする。2本の棒は普通はつながっていないが、手元側の端が鎖や輪っかにつながっているものもある。この箸は、1本がどこかへ紛れて使えなくなる心配がない。箸は昔から二本の棒だが、近年は唯の棒ではなく、持ち方や指の位置が分かるように、輪っかを付けたものや、鉸式にして離れないようにしたものも見かける。外国人など、箸に慣れない人が使い易いように工夫したものだが、本稿では扱わず、伝統的な箸に限ることとする。

箸を使う場面を大別してみる。食べ物を口に運ぶ。調理に使う。高温の湯や油で食材を扱う。何人分かの調理品を1人分に取り分ける。炭火を動かす。その他特殊な場面で使う。

別の視点だが、家庭用と業務用がある。後者は寸法が大きい。素材でみると木が多い。竹もある。金属や合成樹脂もある。芸の入ったものもある。棒に彫りものがあったり、塗りを施し、色彩や模様を取り入れた高価な工芸品もある。使うにもったいなく、飾って置くものか。

箸は耐久品である。普通の使い方なら長期間使える。割箸は使い捨てを前提に生産され、消耗品とされている。使ったら洗わずに捨てることができ便利点もある。しかし長期間使おうと思えば使える。小さな棒として、食事以外にも使える。私の家庭では、使う箸は個々人で決まっているから、割箸は使わない。ただし来客には新品を出す。

箸の歴史は古いが、使われ始めた時期は知らない。食べ物を口に運ぶには、手が“手とり早い”が、食べ物に手を触れないで食べるには、箸などが手(の指)に代わる。箸は指の異体と言える。同じ視点で匙は手の平、フォークは手の姿を連想させる。

食べ物を手掴みで食べるのは原始的だが、文明に遅れていると思うのは正しくない。習慣であって、現代でもそういう人達がいる。日本でも握り飯(商品でないもの)は手掴みで食べる。鮓を手掴みで食べる人は“通”らしい。手掴みが良いか、箸などを介するのが良いかは習慣の違いで、作法の優劣の問題ではない。

箸を家具と呼ぶのは大袈裟だが、れっきとした耐久家財道具である。しかし割箸は消耗品とされている。地球環境保全の機運が高まって久しいが、森林の無反省な伐採が大きな問題となっている。割箸は殆ど木で出来ており、割箸の大量消費は森林伐採を助長するという。個々人から見れば、たかが箸一膳で騒ぐことはない、というのが大方であろう。しかし誰もが無頓着なら“ちりも積もれば山”の諺の通り、多量の木材が消費され、地球規模の資源問題になる。この問題も次第に関心が持たれ、近年は大衆食堂などでも割箸を出さず、合成樹脂製の箸を何人分もまとめて小箱に入れ、食卓に置いてあるのを見かける。使った箸は洗って何回も使う。

割箸の扱いを環境問題に結び付けて真面目に考える人は少ないように見える。割箸に限らず、使い捨ての皿、コップなどの器、匙なども所詮環境問題につながっている。使って洗わずに捨てることのできる。我々はいつの間にか利便さに負けてしまった。